



独立行政法人 国立病院機構

四国子どもとおとなの 医療センター

アートプロジェクト

—今月のショット—

京都、二条城近くにあるギャラリー「モーネ工房」から届くプレゼント、「しりとり絵本」。全て切り絵でできています。一冊一冊が手作りで、制作者は小学生からご年配の方まで。手に取るだけでぬくもりが伝わってきます。



2014年 3月号

—院内の小さな声から—

京都のギャラリー「モーネ工房」の代表井上由季子さんは言います。「みんなが本当に手を動かすときに心は、5歳に戻ってくれるんです。作家として「どやっ!」という作品ではなく、「ねえ、ねえ。面白いでしょ」という感覚。そういう部分が、表現には大事だと、今の時代だから思っています」

先日、赤ちゃんを抱いたお母さんがやってきて、「この子が生まれる時、いろいろ不安で大変だったんです。扉を開けたら優しいメッセージが入っていて、思わず泣いてしまいました。ここで出産できてよかったです。」と言ってくれました。

病院のアートは、扉なのだと思います。そこに誰にでも共通する「立派な答え」があるのではなく、「きっかけ」があるだけ。「ねえねえ」と声をかけてみる。届くかもしれないし、届かないかもしれない。でも、いろんな扉があれば、どれか一つくらいはその人の心に届くかもしれない。扉が開いたら、そこから新鮮な風が吹き込んでくるかもしれない。そんな希望を持って、ものづくりの仲間たちと、出来るだけたくさんの扉をしかけたいと思っています。



作家: 梅田 優子

「祈る」「寄り添う」「待つ」のコンセプトをもとに見る人をやさしくつつみこみたいという気持ちから制作しました。見る人の心が、少しでも明るくなればと思います。

ニッチ

「ニッチ」とは「隙間」「壁のくぼみ」という意味です。四国子どもとおとなの医療センターには院内19カ所に「ニッチ」があります。「ニッチ」は3種類で1セット。1つはアートのニッチ（毎月展示される作品が変わります）2つ目はお花のニッチ（毎週飾られる花が変わります）3つ目は扉のあるニッチ（随時プレゼントとメッセージが届きます）扉のあるニッチに時々入っているプレゼントは、見つけた人なら誰でも持ち帰る事ができます。毎回こっそり届けられるのでいつでも入っている訳ではありません。プレゼントを作ってくれるのは、以前入院していたことのある患者さん。入院中の患者さん、付き添っているお母さん。社会福祉協議会の皆さん。看護師さんやその娘さん。検査技師さん、コンシェルジュさん、取材に来てくれた雑誌の編集者。研修中の学生さん。お見舞いに来ていたおばあちゃん。など様々。でも、みんなに共通している事は「こっそり」ということ。「これ、よければニッチに入れて。」「あんまり上手やないけどどうぞ。」「時間があつたから作ってみました」私が「ありがとうございます」というと「いやいや、好きでしていることだから」って、恥ずかしそうにされます。この反応はみんな共通。不思議だな。と思います。そんな風にして届けられたものだから、ちっとも重くない。「誰かのためにしなくちゃならない」なんて誰も思っていないから、もらった人はきっと軽やかな気持ちで受けとれると思います。作った人も「このこと」を楽しんでくれているから「楽しい時間のお裾分け」でしょうか。「純粋な思いやりだけの循環」が病院の片隅に「こっそり」あります。

今月の一枚